研究紀要Ｒ３－３

生徒指導の実践力向上を目指して
～生徒指導にかかわる校内研修プログラムの開発を通して～（１年次）

島根県教育センター
教育相談スタッフ　相談セクション　共同研究

目　次

【要旨】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

１．研究の背景　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

３．研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

４．研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

（１）校内研修プログラムの概要について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

（２）校内研修プログラム作成に向けた調査より　結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

①　調査対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

②　調査項目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

③　調査の結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

（３）校内研修プログラム試作版の作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

①　教師と子どもとのよりよい関係づくりに関する内容のプログラム・・・・・・・・・・14

②　教職員のよりよい関係づくりに関する内容のプログラム・・・・・・・・・・・・・・・15

③　子どもたちの人間関係づくりに関する内容のプログラム・・・・・・・・・・・・・・・16

５．次年度に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

（１）成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

（２）次年度に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

【引用・参考文献・資料】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

生徒指導の実践力向上を目指して
～生徒指導にかかわる校内研修プログラムの開発を通して～（１年次）

島根県教育センター教育相談スタッフ
相談セクション共同研究

【　要　旨　】

本研究は、生徒指導にかかわる校内研修プログラムを開発し、提供することを通して学校のＯＪＴ支援を行うことを目的としている。そして提供した校内研修プログラムの活用により島根県内の教職員の生徒指導実践力の向上を目指している。

研究１年次の今年度は、県内教職員への調査等を通して学校現場のニーズを探り、効果的な研修のあり方について考察した。２年次となる来年度には研修プログラム案を作成し、実際に学校現場で校内研修として実施をし、その効果や内容を検討する。学校の協力を得ながら研修プログラムを作成し、学校現場へ提供することを目指す。

【キーワード：生徒指導　校内研修　ＯＪＴ支援】

---

１. 研究の背景

生徒指導は学校の教育目標を達成するための重要な機能の一つである。生徒指導が目指すところは「すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよい発達」そして「学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く充実したものになること」と『生徒指導提要』に示されている。また、改訂された『学習指導要領』総則に新設された「第４ 児童生徒の発達の支援」（特別支援学校は「児童生徒の調和的な発達の支援」）の第２項目にも、生徒指導について明記されている。そこには、児童生徒の発達を支える指導の充実を目指すための配慮事項として「児童生徒が自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在及び将来における自己実現を図っていくことができるよう、児童生徒理解を深め、学習指導と関連付けながら、生徒指導の充実を図ること。」と示されている。

生徒指導は、ややもすると問題事象への対応のような消極的な側面だけを指すものという捉えをされたり、校内の一部の教員による取組であると認識されたりすることがあるが、決してそうではない。学校の教育活動全体において、すべての教職員によって行われるべきものであり、生徒指導の実践力はすべての教職員に求められる重要な資質であると言える。また、社会の変化や価値観の多様化に伴い、児童生徒の背景や問題行動の様相も複雑化・多様化してきている。今日の生徒指導においては、これまで以上に多面的・多角的な児童生徒理解と教職員一人一人の実践力の向上が求められていると言える。

生徒指導に関する教職員研修には、教職経験年数に応じた研修、能力開発研修、出前講座の他、各市町村が主催する集合型研修等があるだろう。実践力向上のためには、これらの研修に加え、各学校が主体となって、校内研修の機会を設定していくことが非常に重要であるといえる。そこで本研究では、各学校における生徒指導に関する校内研修を効果的に進めるための校内研修プログラムを開発し提案することで、各学校のＯＪＴを支援することを目指したい。

島根県教育センター教育相談スタッフ相談セクション（以下、当センター・当セクションと表記）では、これまで、教職経験年数に応じた研修、能力開発研修、出前講座等で生徒指導・教育相談に関する内容を扱って

きた。それらの研修においては、講義だけでなく、体験的な研修も複数取り入れ、内容を構成してきた。また、過去にはワークシート・冊子・リーフレット等の刊行物の提供も各学校に対して行ってきた。これらの刊行物は、研修講座や出前講座の中での活用はしてきたものの、学校現場における活用が十分にはされてきたとは言い切れない。紙媒体での刊行物は、学校現場に届けられてからの年数経過により、残念ながら認知も活用もされなくなるという実態があった。しかしその内容には、今日の生徒指導においても、変わらず大切にしていくべき不易の基本的なテーマを取り上げたものが多く、生徒指導の実践力向上をねらう校内研修の内容として、これからも活用が十分可能であると言ってよい。本研究において、新たな校内研修プログラムを作成する上では、当セクションでこれまで扱ってきた研修講座・出前講座等の内容や過去の刊行物の内容もおおいに参考にし、活用していきたい。

コロナ禍によりもたらされた社会の急激な変化は教職員研修の形態にも大きく影響を与えている。ＧＩＧＡスクール構想により各学校における通信回線・ＩＣＴ機器の整備が進み、オンラインやオンデマンドといった、新たな研修形態が急速に一般化してきた。当セクションでは、昨年度まで３年間取り組んできた共同研究において「保護者との関係づくり」をテーマとした「校内研修パッケージ」を作成した。この研究では動画を活用した研修プログラムを作成し、ビデオファイル形式のデータとしてＤＶＤに収録し、県内の各学校に提供した。コロナ禍以前に構想しスタートした研究であったが、最中にコロナ禍を経て３年間の取組を終えた。動画視聴を取り入れたビデオファイル形式での「校内研修パッケージ」の提供は、奇しくもコロナ禍による社会の変化とも相まって、今日の学校現場での活用がなされやすい形態での提供となったと、結果的に言えるだろう。本研究における研修プログラムの提供に際しても、電子データでの提供や研修動画のオンデマンド配信等、時代の変化に即した研修の在り方について検討し、今日の学校現場で活用されすい形での提供を目指していきたい。

本研究１年次の今年度は、県内教職員への調査等を通して、学校現場のニーズを探ったり、効果的な研修のあり方について考察したりする。２年次には研修プログラム案を作成して、実際に学校現場での校内研修として実施をし、その効果や内容を検討する。その後、学校の協力を得ながら研修プログラム案を修正し、学校現場へ提供したい。また、取組を進めるにあたっては、教育指導課子ども安全支援室など、県内の他機関との連携も図り、本研究が県全体の生徒指導の実践力向上に寄与するものとなることを目指していきたい。

２. 研究の目的

生徒指導にかかわる校内研修プログラムを開発し、学校に提供することにより、学校のＯＪＴ支援を行う。

３. 研究の方法

１年次（今年度）

・校内研修プログラムの概要の検討
・校内研修プログラムの作成に向けた調査・分析
・校内研修プログラム試作版の作成

２年次

・校内研修プログラム案の開発
・協力校における校内研修プログラム案の実施・検証・改良
・校内研修プログラムの提供

４. 研究の内容

（１）校内研修プログラムの概要について

本研究では、生徒指導の実践力向上をねらう校内研修プログラムを作成し、学校現場への提供をめざす。昨年度までの研究の取組では、研究協力校である複数の小、中、高等学校において、校内研修として実施検証を行い、提供した研修プログラムが教職員の意欲や力量を高める一助になることや、学校のＯＪＴを支援する手だてとして有効であることが見えた。本研究を進めていく上でも、そこで明らかとなった有効な手立てを参考にしながら取組みを進めたい。

まず、昨年度までの取組では、校内研修パッケージを多忙な学校現場で活用してもらえるものにするために必要なことを、「５つの要件」として以下のように整理していた。この要件は、本研究においても引き続きプログラム作成上の方針として、念頭に置きながら取り組んでいく。

A　研修主催者が研修内容に精通していなくても実施できるものであること
B　多忙な学校現場でも負担感なく実施可能な分量（時間）であること
C　教職員が日頃課題意識を持っていることとつながる内容であること
D　関係づくりへの示唆を含むものであり、かつ内容がわかりやすいものであること
E　初任者研修の校内における一般研修としても活用できるものであること

また、各研修プログラムをビデオファイル化したことは、どの学校からも高い評価を得た。再生するだけで自動的に演習、協議、解説といった研修を進めることができるため、校内に研修内容に精通した人がいなくても実施できる、いつでもどこでも同じように簡単に実施できるといったよさを校内の研修担当者が感じられたことがその理由であった。本研究においても同様にビデオファイルデータでのプログラム提供を基本としたい。ただ、データ提供の仕方については検討が必要である。昨年度までの研究の成果物はＤＶＤでのデータ提供を行ったが、学校現場でより活用されやすい提供の仕方を本研究では探りたい。

また、事例の一場面や対応例の紹介に動画を活用したことは、概要の把握や内容の理解に有効であることが明らかとなった。本研究の取組においてもプログラムの内容によっては積極的に動画を取り入れることにも取り組みたい。

実際に提供する研修プログラムの内容については、１年次の調査をもとに、２年次に具体的に検討していく。１年次にあたる今年度はまず、昨年度の研究の成果物である『校内研修プログラム　保護者と学校のよりよい関係づくり』について、その実施状況を当セクション主管の講座等において調査する。

さらに「生徒指導にかかわる校内研修でやってみたい研修内容」についても調査を行う。それらの結果をもとにプログラムの実用に有効な提供方法の検討や、学校のニーズに応じた生徒指導に関する新たな研修プログラムの開発を行う。学校現場のニーズを十分に把握したうえで、その内容を構成していきたい。

研修プログラムの開発にあたっては、当セクション主管の研修講座・出前講座等の内容や、当センターの過去の刊行物の内容、また県内の生徒指導にかかわる他機関が作成した刊行物等も参考にしていきたい。当セクションの過去の刊行物はいずれも紙媒体での提供を前提に作成されてきたものである。これらは現在島根県教育センターのホームページから PDF ファイル形式でダウンロードが可能となっている。これらの内容の一部をビデオファイル形式等、新たな形にリニューアルして提供することも一案として考えられる。

実際の研修プログラム案の作成は来年度の実施となるが、今年度は、学校におけるさまざまな人間関係づくりに関する内容について取り上げ、試作プログラムを作成する。

（2）校内研修プログラム作成に向けた調査より　結果と分析

生徒指導に関する新たな研修プログラムの開発に向け、以下の２つのことについて調査を実施した。
今年度は、当セクション主管の能力開発研修や出前講座等の受講者を対象にアンケート調査を行った。

1．Ｒ２作成 校内研修パッケージ「保護者と学校のよりよい関係づくり」（以下、Ｒ２研修パッケージと表記）の活用状況の調査
2．生徒指導にかかわる校内研修でやってみたい内容の調査

①調査対象

（講座、実施日、校種、回答者数）

講座・研修名	実施日	対象校種	回答者数(人)
生徒理解と支援講座	R3. 9.10	小・中・高・特	49
教職員のかかわる力を高める実践講座	R3. 11.5	小・中・高・特	31
不登校の理解とよりよい支援 出前講座	R3. 11.8	中	14
出雲市生徒指導部研修会	R3. 11.26	小・中	26
			計 120

（校種ごとの経験年数別人数）

校種	経験年数				
	1～5 年	6～10 年	11～20 年	21 年以上	計
小学校	13	7	11	32	63
中学校	7	5	13	15	40
高等学校	0	0	3	7	10
特別支援学校	2	1	1	3	7
計（人） 割合	22 (18%)	13 (11%)	28 (23%)	57 (48%)	120

②調査項目

1．校内研修パッケージ「保護者と学校のよりよい関係づくり」の活用状況の調査

【設問１】あなたは島根県教育センター教育相談スタッフ相談セクションが作成した校内研修パッケージ「保護者と学校のよりよい関係づくり」を知っていますか。

（「はい」「いいえ」のどちらかを選択）

【設問２】あなたは校内研修パッケージＤＶＤ「保護者と学校のよりよい関係づくり」を活用しましたか。

（「はい」「いいえ」のどちらかを選択）

【設問３－１】設問２で「はい」を選択した場合に回答

校内研修パッケージはどこで活用しましたか？あてはまるものに〇をつけてください

・校内研修　・学年部研修　・初任者研修　・個人研修　・その他（　　）

（いずれかを選択）

【設問３－２】設問２で「はい」を選択した場合に回答

自分が活用したプログラムの□に✔をつけてください。

（いずれかを選択　複数回答）

第１部
- □ １ 基本姿勢その１「言葉以外から伝わるもの」
- □ ２ 基本姿勢その２「相手の思いを感じ取る」
- □ ３ 基本姿勢その３「思いを伝えるときに」
- □ ４ ケーススタディ1「話を聴くときに」

第２部
- □ １ はじめに
- □ ２ ケーススタディ2「保護者からの要望があったときに」
- □ ３ ケーススタディ3「言いにくいことを保護者に伝えるときに」
- □ ４「自分を守る」
- □ ５「自分を見つめる」

【設問３－３】設問２で「はい」を選択した場合に回答

活用した感想をお聞かせください。

（自由記述、複数回答）

【設問３－４】設問２で「いいえ」と答えた場合に回答

本パッケージには以下のようなプログラムが入ってます。このプログラム一覧を見てやってみたいプログラムがあればプログラムの（　）に〇をしてください。

（複数回答）

第１部
- （　） １ 基本姿勢その１「言葉以外から伝わるもの」
- （　） ２ 基本姿勢その２「相手の思いを感じ取る」
- （　） ３ 基本姿勢その３「思いを伝えるときに」
- （　） ４ ケーススタディ1「話を聴くときに」

第２部
（　）　１　はじめに
（　）　２　ケーススタディ2「保護者からの要望があったときに」
（　）　３　ケーススタディ3「言いにくいことを保護者に伝えるときに」
（　）　４「自分を守る」
（　）　５「自分を見つめる」

２．生徒指導にかかわる校内研修でやってみたい内容の調査

【設問４】生徒指導・教育相談に関する校内研修で、学んでみたい内容をお知らせください。

（自由記述、複数回答）

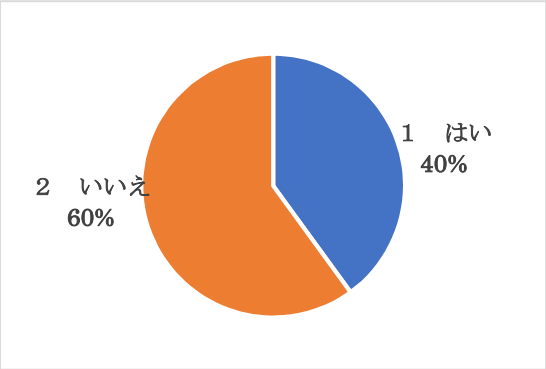
③調査の結果と分析

１．校内研修パッケージ「保護者と学校のよりよい関係づくり」の活用状況について

【設問１】あなたは島根県教育センター教育相談スタッフ相談セクションが作成した校内研修パッケージ「保護者と学校のよりよい関係づくり」を知っていますか。
（「はい」「いいえ」のどちらかを選択）

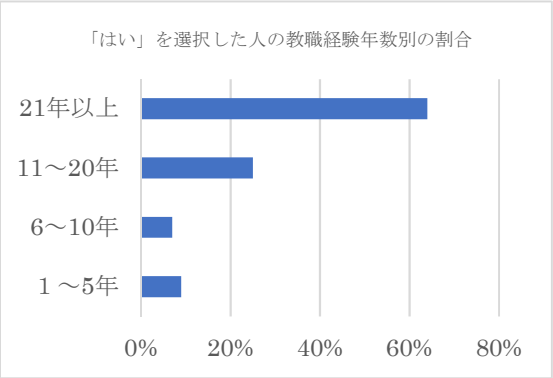
「はい」と「いいえ」を選択した人の割合

	回答数（人）	割合
１：はい	47	40%
２：いいえ	73	60%



「はい」を選択した人の教職経験年数別の割合

	１～5 年	6～10 年	11～20 年	21 年～
１：はい (47/120 人)	2 / 22 人	1 / 13 人	7 / 28 人	37 / 57 人
割合	９％	７％	25%	64%



設問１の回答では、Ｒ２研修パッケージを「知っている」人の割合を、「知らない」人の割合が大きく上回る結果となった。この結果から、Ｒ２研修パッケージは、学校に配布はしたものの、学校の中では多くの先生方に認知されていない状況であることが分かった。

「知っている」と回答した人の教職経験年数別の割合は、21 年以上の教職員の 64%が「知っている」と回答したのに対し、６～10 年目の教職員は７％、１～５年目の教職員は９％が「知っている」と回答し、経験年数によって認知の割合に大きな差があらわれた。この結果から学校の中では、経験年数が長い教職員は、刊行物に関心をもっていたり、認知する機会が与えられたりしているが、経験年数が浅い若手教職員は、なかなか認知しにくい状況があるのではないかと予想される。

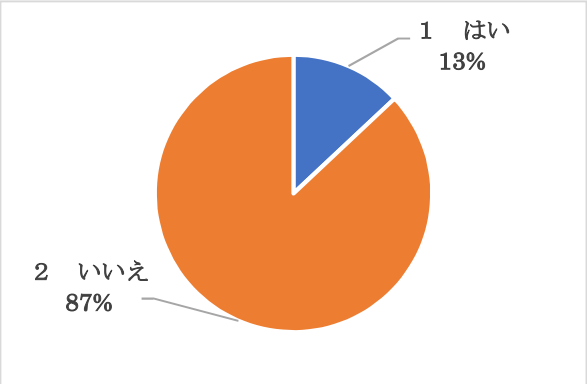
経験年数が浅い若手教職員であっても、本調査でＲ２研修パッケージを「知っている」と答えた１～５年目の９％、６～10 年目の７％の教職員は、全て生徒指導主任・主事という立場の方々であった。同様に、11 年目以上、21 年目以上の教職員で「知っている」と答えた方々の多くも生徒指導主任・主事であった。この結果から、校務分掌で生徒指導に携わっている方であれば若手であってもＲ２研修パッケージを認知する機会があると考えられる。と同時に、生徒指導主任・主事は認知していても、校内全体に情報提供や研修等での活用がなされなければ、全教職員が認知したり活用したりすることにつながりにくいことも予想される。

これらの結果から、学校に配布しただけでは、研修プログラムの認知や活用にまでつながりにくいことが課題として見えてきた。特に、経験年数や校務分掌に関係なく、誰でも活用できることが、このＲ２研修パッケージを各学校に提供した目的でもある。研修プログラムを校内研修で活用してもらうために、提供方法の検討や広報の工夫が必要であることが分かった。

【設問２】あなたは校内研修パッケージＤＶＤ「保護者と学校のよりよい関係づくり」を活用しましたか
（「はい」「いいえ」のどちらかを選択）

「はい」と「いいえ」を選択した人の割合

	回答数（人）	割合
１：はい	15	13%
２：いいえ	104	87%



設問２の回答にあるように、Ｒ２研修パッケージを「活用した」と答えた人の割合は、全体のわずか 13%であった。この結果から、Ｒ２研修パッケージは現在、ほとんどの学校で活用されていないことが予想される。また、設問１の「認知」の割合よりも、設問２の「活用」の割合はさらに下がっていることから、Ｒ２研修パッケージは「知っている」が校内研修として「活用されていない」ことも分かった。

活用されていない理由としては、保護者対応という研修内容のニーズの有無、研修時間の確保の難しさ等が考えられる。新たな研修プログラムを開発し、学校で有効に活用してもらうために、今後、活用が難しい理由も探っていきたい。

【設問３－１】設問２で「はい」を選択した 15 名の回答

校内研修パッケージはどこで活用しましたか？あてはまるものに〇をつけてください。

・校内研修　・学年部研修　・初任者研修　・個人研修　・その他（　　）

（いずれかを選択）

研修形態別の人数

	回答数（人）
校内研修	10
学年部研修	0
初任者研修	0
個人研修	5
その他	0

【設問３－２】設問２で「はい」を選択した場合に回答

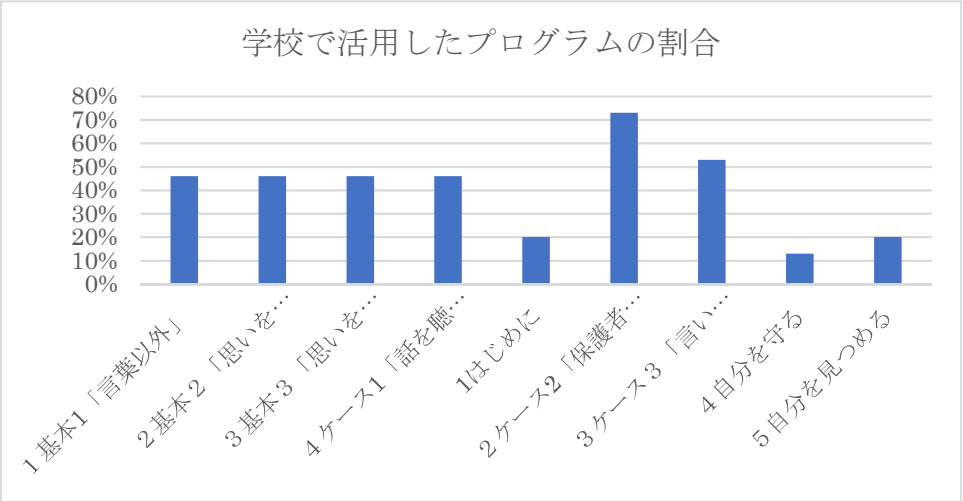
自分が活用したプログラムの□に✔をつけてください。（複数回答）

第１部　活用したプログラムの割合

第１部	回答数	割合
１基本姿勢１「言葉以外から伝わるもの」	7	46%
２基本姿勢２「相手の思いを感じ取る」	7	46%
３基本姿勢３「思いを伝えるときに」	7	46%
４ケーススタディ1「話を聴くときに」	7	46%

第２部　活用したプログラムの割合

第２部	回答数	割合
１はじめに	3	20%
２ケーススタディ2 「保護者からの要望があったときに」	11	73%
３ケーススタディ3 「言いにくいことを保護者に伝えるときに」	8	53%
４「自分を守る」	2	13%
５「自分を見つめる」	3	20%



設問３－１の回答から、Ｒ２研修パッケージは校内研修や個人研修等、様々な研修形態で活用されたことが分かった。このようなビデオファイル化された研修プログラムを学校に提供することで、研修対象者を絞らず誰でも活用することや、いつでも、どこでも活用することができ、当セクションの様々な研修内容を、学校に直接届けられる新たな研修スタイルになる可能性も見えてきた。

設問３－２の「活用したプログラム」の回答を見ると、具体的な事例から考える「基本姿勢」や「ケーススタディ」は、おしなべて活用されていることが分かった。特に、課題が生じた対応を扱った第２部の２つのケーススタディを活用した学校は多く、学校が課題が生じたケースに対する具体的な対応を求めていることがうかがえる。

【設問３－３】設問２で「はい」を選択した場合に回答
活用した感想をお聞かせください。（自由記述、複数回答）

本研修パッケージは学校現場で有効に活用してもらえるよう「校内研修パッケージの５つの要件」を設定し、その要件を満たすことを目指して作成してきた。

校内研修パッケージの５つの要件
- A 研修主催者が研修内容に精通していなくても実施できるものであること
- B 多忙な学校現場でも負担感なく実施可能な分量であること
- C 教職員が日頃課題意識を持っていることとつながる内容であること
- D 関係づくりへの示唆を含むものであり、かつ内容がわかりやすいものであること
- E 初任者研修の校内における一般研修としても活用できるものであること

設問３－３の感想の記述は、この５つの要件に関連した内容のものが多く見られ、照らし合わせると次のように分類することができた。

校内研修パッケージを活用した感想

A 研修主催者が研修内容に精通していなくても実施できるものであることに関連した感想

・具体的な事例が分かりやすく示されていて、使いやすい。
・ケースが動画で示されていて、分かりやすい。
・映像資料がとても充実していて、分かりやすい。
・使いやすく、分かりやすい。

B 多忙な学校現場でも負担感なく実施可能な分量であることに関連した感想

・校内研修で簡単に活用しやすい。
・短くてやりやすい。
・ケーススタディを短い時間で行うことができ、校内で活用しやすい。

C 教職員が日頃課題意識を持っていることとつながる内容であることに対応した感想

・自分に置き換えて考えられるよさがある。
・実際の場面に生かすことができる。
・ここで示されたことを意識して実践したら役に立ったので、学校で伝えたい。

D 関係づくりへの示唆を含み、かつ内容がわかりやすいものであることに対応した感想

・関係づくりの基本をしっかり学ぶことができる。
・関係づくりの基本を確かめることができる。
・相手を大切にした対応の大切さが学べる。
・かかわる上で大切にすることを再確認できる。

E 初任者研修の校内における一般研修としても活用できるものであることに対応した感想

・若手にとって学びになる内容になっている。経験者には、再確認できる内容になっている。
・若手によい。

その他

・話し合って共有できる場面があってよい。
・話し合いの場が設定されていてよい。
・話し合いやすく工夫されている。
・校内でロールプレイをやってみたい。
・配布だけでは実施が難しい。

Ｒ２研修パッケージに対する肯定的な感想から、これが５つの要件を満たすものとなっていたということや、今後作成する新たな校内研修プログラムにおいても、引き続きこの要件を満たすものを目指すとよいということが見えてきた。

その他、Ｒ２研修パッケージの中に話し合う場面を取り入れたことがよかったという感想や、研修プログラムの中でロールプレイを実際に行いたいという要望も出ている。この研修プログラムは、決して正解を示すものでなく、それぞれの学校が、自校の実態を踏まえた上で、全教職員で知恵を出し合い、その学校にとってよりよい結論を導き出されることを期するものである。これから作成する研修プログ

ラムにおいても、協議する場面や演習場面を工夫して取り入れ、学校が有する力を、人間関係づくりや生徒指導上の課題の解決に活用できるようにしていきたい。

一方で、配布しただけでは実施が難しいという意見があった。活用につなげるために提供方法を工夫し、広報活動や情報提供のあり方についても検討していきたい。

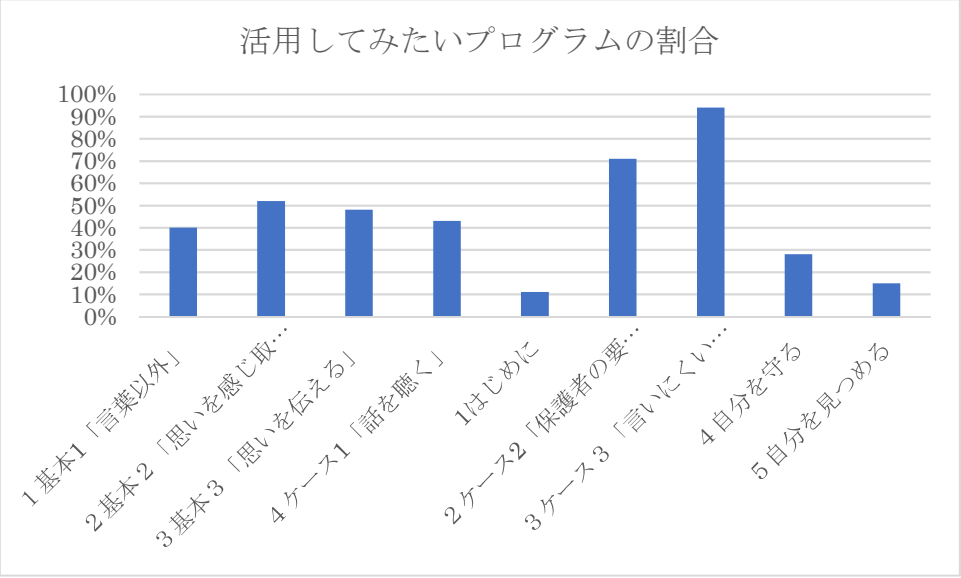
【設問３－４】設問２で「いいえ」と答えた場合に回答
本パッケージには以下のようなプログラムが入っています。このプログラム一覧を見てやってみたいプログラムがあればプログラムの（　）に〇をしてください。
（いずれかを選択　複数回答）

第１部　活用してみたいプログラムの割合

第１部	回答数（人）	割合
１基本姿勢１「言葉以外から伝わるもの」	42	40%
２基本姿勢２「相手の思いを感じ取る」	54	52%
３基本姿勢３「思いを伝えるときに」	50	48%
４ケーススタディ1「話を聴くときに」	45	43%

第２部　活用してみたいプログラムの割合

第２部	回答数（人）	割合
１はじめに	11	11%
２ケーススタディ2 「保護者からの要望があったときに」	74	71%
３ケーススタディ3 「言いにくいことを保護者に伝えるときに」	98	94%
４「自分を守る」	30	28%
５「自分を見つめる」	16	15%



設問３－４の回答からは、Ｒ２研修パッケージを活用していない受講者が、基本姿勢を学ぶプログラムや具体的な事例にもとづいたケーススタディに興味関心をもったことがうかがえた。その中でも特に受講者の多くが、第２部の課題が生じたケースを扱った２つのケーススタディをやってみたいと回答している。このことから、具体的な事例に基づいて対応を学ぶことにニーズがあることがうかがえる。新しいプログラムの作成において、演習や協議で取り上げる事例や内容を決定する際は、現場が課題意識をもっていることとのつながりを考慮し、あわせて様々な事例や対応に汎用性がある内容とすることも大切にしていきたい。別の角度から見ると、研修のタイトルも研修に対する興味関心や必要感をもつ上で大切な役割があることが分かる。手にとって、活用しようという思いがもてるような研修プログラムのタイトルを工夫することは、研修の内容をより明確にしていく事につながると考える。

２．生徒指導にかかわる校内研修でやってみたい内容について

【設問４】生徒指導・教育相談に関する校内研修で、学んでみたい内容をお知らせください。
（自由記述、複数回答）

生徒指導にかかわる校内研修でやってみたい内容

不登校の対応に関する研修
・不登校児童・生徒への対応、かかわり方
・不登校児童・生徒の保護者への対応
・関係機関との連携について
・未然防止・初期対応について
・不登校傾向の子どもへの対応ケーススタディ

いじめの対応に関する研修
・未然防止・初期対応について
・いじめ対策委員、いじめ対応委員のマネジメントについて

生徒指導に関する様々な取り組みや校内体制に関する研修
・生徒指導案件を校内で遅れないように共有するタイミング、流れについて
・外部機関とつながる時の注意点
・外部機関との連携について（窓口の種類、活用例）
・ＳＣ、ＳＳＷとの連携について
・教育相談の基本姿勢や教育相談、Q-Uの活かし方について
・教育相談で生徒が自分の思いを伝えられる質問項目
・事例検討会の効果的な進め方

様々な困り感を抱える子どもへの対応に関する研修
・集団不適応への対応
・ＳＯＳを出せない子とのかかわり方について
・集団心理が働く子どもたちへの対応について
・愛着について、愛着障害とその支援について

・感情をコントロールできない子への対応について
・発達障がいがある子どもの問題行動に対する理解と指導について
・ＡＳＤの子どもへの指導について
・グレーゾーンの子どもへの生徒指導と学習指導
・問題行動を未然に防ぐ予防的な生徒指導について
・問題行動への対応と問題を起こす子どもへのかかわり方

特別支援教育と関連した研修
・特別支援教育と生徒指導　校内組織づくりについて
・特別支援教育の視点を持った教育相談について
・特別支援学級の生徒指導

子どもの理解と支援に関する研修
・児童理解・生徒理解・仲間理解
・子どもの気持ちや思いを学ぶ内容
・子どもとの信頼関係の築き方
・傾聴について
・声の掛け方、褒め方を学ぶ内容

子どもの成長や人間関係づくりを高めることに関する研修
・子どもが自己選択、自己決定ができるようになるための方法
・子どもが自己開示をすることができるようになるための方法
・できないことにどう自分からやる気を持って取り組ませるとよいか
・子どもの人間関係づくりのスキル
・アサーションについて
・自己肯定感を高めるクラスづくりについて
・居心地のよい学級づくりについて

保護者への対応に関する研修
・本ＤＶＤを使った研修
・様々な場面での保護者対応
・子どもへの指導後、保護者への連絡の注意点やポイント
・教育虐待の保護者に対しての距離の縮め方
・状況が著しく困難な家庭へのアプローチ

現代的な課題への対応に関連した研修
・ＬＧＢＴ関連
・ネット社会での問題に対する学校の対応について
・生徒間トラブルへの対応（介入や支援のあり方）
・コロナにおける生徒指導について

生徒指導を進める上で難しさを感じていること

・生徒に寄り添った支援とは本当はどういう意味があるのか？
（理解や丁寧な対応の必要性は分かっていても、現実なかなか上手くいかないのはなぜか）
・スキルと感覚や思いをつなぐようなものを学ぶ研修を受けたい

設問４の回答からは、生徒指導・教育相談に関する校内研修で学びたい内容が多種多様にあることや各校種、各学校それぞれが生徒指導上の様々な課題を抱えていることが見えてきた。今後、ここにあげられた内容を、全て研修プログラムとして取り上げることはできないが、当セクション主管の研修講座等の内容や当センターの過去の刊行物の内容と照らし合わせ、校内研修プログラムとして開発できるものはないか検討していきたい。

（３）校内研修プログラム試作版の作成

１年次である今年度は、アンケート調査の実施・分析と並行して、新たな研修プログラムの素案となる試作プログラムの作成も試みた。

Ｒ２研修パッケージは、「保護者と学校の人間関係づくり」に関する内容であった。あらゆる人とのよりよい人間関係は、生徒指導を機能させる上で欠かせないものである。そこで、試作版作成においては、この視点をベースに、学校における様々な人間関係づくりに関する内容を取り上げることとした。

①教師と子どもとのよりよい関係づくりに関する内容
②教職員同士のよりよい関係づくりに関する内容
③子どもたち同士の人間関係づくりに関する内容

各プログラムでどのような内容を取り上げるか、以下のような点から検討し、試作版を作成した。

・当セクションが毎年行う特定の受講者を対象にした研修や講座の中から、各学校に校内研修プログラムとして提供し、学校のＯＪＴを支援できるような内容を探る。
・当セクションが作成した過去の刊行物に掲載している様々な演習やワークシートの中から、新たな校内研修プログラムとして活用できそうなものを探る。
・忙しい学校現場で実施可能で、且つ、学校の教職員の有する力が研修で生かされるように、15 分程度で実施でき、演習や協議が効果的な内容かどうか検討する。
・今年度実施したアンケートで受講者が希望した、「校内研修でやってみたい内容」との関連やつながりも考慮する。

今年度考案した試作プログラムの概要は以下の通りである。

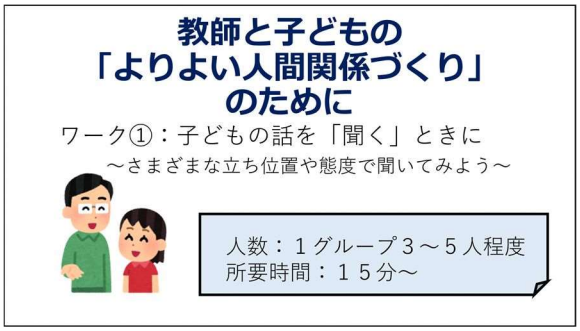
①教師と子どもとのよりよい関係づくりに関する内容のプログラム

教師と子どもの人間関係づくりに関する内容は、当セクションが毎年実施する教職経験年数に応じた研修や能力開発講座の中で、関係づくりの基本姿勢やかかわり方を講義や演習を通して学ぶことができる。

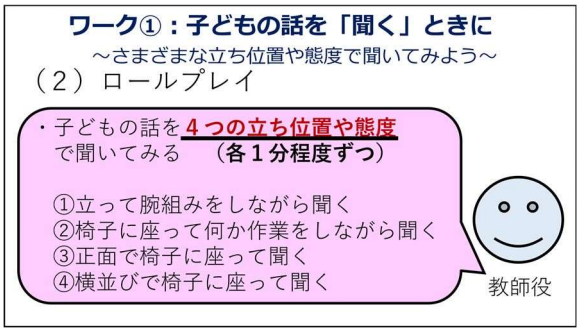
特定の受講者が対象のこれらの研修内容を、校内研修で扱うことができるようにしたいと考え、試

作プログラムとして作成することとした。

今回は、子どもの話を「聞く」ということに焦点をあてた研修プログラムを考案した。本プログラムは、「聞く」ことについて学ぶ研修の第１弾となる内容を想定している。子どもの話を聞くときの教師の立ち位置や態度によって、子どもにどのような印象を与えるのかを、ロールプレイを通して体感することをねらいとしている。



【教師と子どもの人間関係づくりに関する内容】



【ロールプレイを通して体感する】

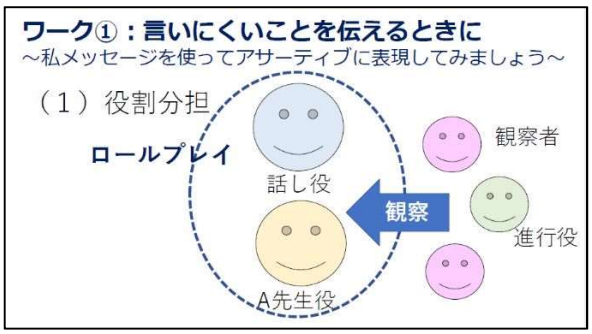
②教職員のよりよい人間関係づくりに関する内容のプログラム

教職員同士の人間関係づくりに関する内容については、当センター作成の刊行物「教職員のよりよい人間関係づくりのために(2008)」の中で、関係づくりに役立つ考え方や取り組むとよい活動をワークシート等を活用して学ぶことができる。紙媒体で提供された過去の刊行物は、時の経過と共に学校で活用されなくなる状況がある。過去の刊行物が経年経過しても手軽に活用できるようにしたいと考え、ビデオファイル形式でリニューアルしたプログラムを作成することとした。

今回はこの刊行物にある、相手に「伝える」ということに焦点をあてた研修プログラムを考案した。自分の思いや考えを正確に伝えていくことはより良い人間関係を築いていくうえで欠かせない要素の一つである。その上に相手を思いやりながら自分の気持ちにふたをすることなく伝えていくことは意識的に自己表現のスキルを改善したり向上させたりしていくことが必要である。また、このようなスキルは、１度研修を受ければすぐに身につくというものではなく、短時間でもいいので繰り返し行うことで効果を高めていくことができる。そのため、校内研修において実施しやすいものとなることを目指している。

また、本プログラムは、「伝える」ことを学ぶ第１弾となる研修を想定し、言いにくいことを相手に伝えるとき、アサーティブに伝えると自分や相手がどのように感じるか、ワークシートやロールプレイを通して体感することをねらいとしている。

【教職員同士の人間関係づくりに関する内容】



【ロールプレイを通して体感する】

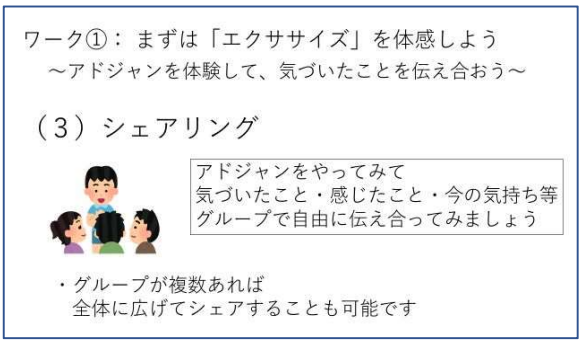
③子どもたちの人間関係づくりに関する内容のプログラム

子どもたちの人間関係づくりに関する内容については、当セクションの出前講座「子どもの人間関係づくりのために」の中で、その手法の１つである「構成的グループエンカウンター（以下 SGE と表記）」について、その概要や進め方を学ぶことができる。出前講座は、学校全体で取り組めるよさがあるが、１校につき１講座しか受講できないことや、申込期間が短いといった制約があり、多くの学校に活用してほしい内容を広めにくい状況がある。そこで、出前講座で扱う内容の校内研修プログラム化を検討した。

今回は、学校がＳＧＥに取り組むにあたり、教職員自身がＳＧＥとはどのようなものか実感をともなって理解できるよう「体験する」ことに焦点をあてた研修プログラムを考案した。ＳＧＥに取り組む上で、子どもたちが安心してみんなで楽しく取り組めることが大切なことである。そこで、ＳＧＥのエクササイズを教師自身が体験し、ＳＧＥの楽しさやよさを実感をともなって理解することや、子どもたちにとってどのようなことを大切にするとよいか見いだすことを期待している。

本プログラムは、ＳＧＥを「体験する」ことの第１弾の研修を想定し、ＳＧＥでグループが取り組むエクササイズ「アドジャン」を体験することとした。「アドジャン」を実際に体験することを通して、エクササイズに取り組むとどのような気づきや気持ちが得られるか、どのようなよさや難しさがあるか体感することをねらいとしている。

【子どもたちの関係づくりに関するプログラム】



【シェアリングで気づきを共有する】

５　次年度に向けて

１年次の取組を終えて、その成果を整理し、今後の方向性を定め１年次のまとめとする。

（１）成果

①学校の現在のニーズをもとに校内研修として行うための必要な要素を整理できた

生徒指導上の喫緊の課題である「不登校」、「いじめ」に関する研修は、全校種から学びたい内容として意見があがった。これらに関連して、「ＳＣやＳＳＷ、外部機関との連携」等、校内体制や関係機関との連携に関する研修を希望する意見や、「教育相談」、「アンケートＱ－Ｕ」、「事例検討会」といった校内における生徒指導の様々な取組に関する研修を希望する意見も多かった。

このような調査や現職教員の声から、「教職員と児童生徒」「教職員同士」「子ども同士」という誰もが過ごす日々の中にある人と人とのかかわりにおいて「よりよい人間関係をつくっていく」ことが教職員に必要とされている資質やスキルであることが整理された。

②ＯＪＴを支えるための様々な課題を解決できる条件は何か整理し、試作版プログラムを作成できた

教育現場においてあらゆる分野の「知」の継承が課題となっている。教育相談の資質やスキルにおいてもＯＪＴで進めていくことは様々な障壁が考えられる。その困難な状況を解決していくために教育相談という専門的な知識やスキルが要求される分野においても、学校のＯＪＴを進めるためには工夫されたプログラムを開発し、いつでも、だれでも、簡単に実施できるものでなくてはならない。その条件として、研修に不慣れな担当者であっても実施できるものであり、研修時間が短時間で終了できるもの、チーム学校としての力を校内のメンバーの力によって高めていけるものなどが必要であるという条件を仮説にして、３つの試作版プログラムを作成することができた。

（２）次年度に向けて

上記の成果を受けて、次年度に工夫されたプログラムを開発するために以下のような方向性をまとめた。

①これまで活用しにくかった研修内容やワークシート等の有効活用

これまでの研修は、各学校の担当者を対象に行われてきたため、受講者の資質向上にはつながっているが、自校全体の支援にはつながっていなかった。また、当センターが作成した生徒指導・教育相談の関する刊行物には優れた内容のものが多くあったが、紙媒体で作成されているため活用されにくいといった課題があった。

そのような点を解決し、自校で広めることができるプログラムを開発していくことを目指していきたい。

②自校の実態に応じて組み合わせて活用できるプログラムの開発

教師が子どもとの信頼関係を築く上で、子ども理解や支援のあり方を学ぶ研修や、子ども自身の成長や互いの関係づくりを学ぶ研修を希望する意見が多かった。また、様々な保護者への具体的な対応を学びたいという意見も多くあげられていた。

このような現場のニーズは、各学校が置かれている状況や抱えている「他へのかかわりの難しさ」に対応できる内容が求められているのではないか。しかし、各学校の状況はそれぞれ異なっている。どの学校のニーズにも応えるようなプログラムを揃えることは容易ではない。さらに短時間ででき、それを自校の実態に合ったプログラムを求めるとなると、その学校自身で自由に内容を組み合わせることができるようなつくりになっていた方が良い。欲を言えば、状況の変化にも対応できるように容易にカスタマイズできるプログラムの開発を進めていく必要がある。

③学校現場での活用に繋げるための工夫

今年度行った調査により、研修プログラムの内容や構成を工夫し作成していても、これをただ配布するだけでは、学校現場での活用には繋がりにくいということが明らかとなった。内容や構成の工夫に合わせて、活用に繋がりやすい提供の仕方や広報のあり方についても検討をしていきたい。

④教育相談の知見を生かしたプログラム開発

生徒指導上の多種多様な課題を解決するために役立つ知識や具体的な手法を学びたいという意見が増える一方で、生徒指導や教育相談の研修で学んだ知識・スキルが、必ずしも実際の対応で上手く生かされないといったことに課題を感じている意見もいただいた。

このような意見は、かかわりや課題解決に決して正解はなく、研修で学んだ知識・スキルは目の前の子どもに合わせて柔軟に取り入れていく必要があるということを意味している。また、スキルを求め過

ぎて、マニュアルを揃えていくような対応ではうまくいかないこともあるのではないだろうか。

そこで、教育相談の基本姿勢である「目の前の人を大切にしてかかわり続けること」について伝えることも忘れずに取り入れていきたい。人は刻一刻と変化する存在であり、目の前の相手のありのままの姿にかかわることの大切さを根底に据えて内容を検討していきたい。

⑤教育相談と特別支援教育の共通課題への対応

事前の調査では、「集団不適応」、「発達障がい」、「愛着」、「感情がコントロールできない子」等、様々な困難さを抱え、個別に配慮が必要な子どもたちへの対応を学びたいという意見がとても多かった。全校種の受講者から研修を希望する意見が出されており、どの校種でも個別に配慮が必要な子どもへの対応に困難さを抱えている現状があることがうかがえ、研修プログラムの開発の必要性を感じた。また、特別支援教育と関連した研修を希望する意見も多く、このような内容の研修プログラムについては、その視点を取り入れて開発していきたい。

⑥生徒指導と教育相談の共通課題への対応

本研究の内容は「いじめ」「不登校」「暴力行為」など生徒指導上の課題と直結している。県の生徒指導に関する機関である子ども安全支援室等と連携を図って作成することも考えられる。県全体で考える生徒指導の方向性や方針として示していくこともできるであろう。

例えば、「不登校」や「いじめ」に関する研修は、当セクション主管の能力開発講座や教職経験年数に応じた研修の中で行っているものもある。これらの研修から内容を取り出して、校内研修プログラムとして提供することも考えられる。また、当センターがこれまで作成した刊行物や当セクションの出前講座の中から、現場のニーズに合わせたアレンジを取り入れて校内研修プログラムとして作成することもできるであろう。それらを子ども安全支援室の事業や施策の方向性と連携させながら考えていきたい。

最後に、本研究を進めるに当たり、コロナ禍の中、様々な制約のある中ご協力いただいた皆様に感謝の意を表したい。

なお、本研究は島根県教育センター教育相談スタッフ相談セクション　大野寛人、笹原由乃、吉田卓矢が共同で行ったものである。

【引用・参考文献・資料】

○文部科学省（2017）「小学校学習指導要領」
○文部科学省（2017）「中学校学習指導要領」
○文部科学省（2017）「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」
○文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領」
○文部科学省（2019）「特別支援学校高等部学習指導要領」
○文部科学省（2010）「生徒指導提要」
○島根県立松江教育センター(2006)「気にかかる子どもに関するワークシート集」
○島根県立松江教育センター(2008)「教職員のよりよい人間関係づくりのために」
○島根県教育センター(2010)「生徒指導･学級経営上の課題への取組（事例集第一集）」
○島根県教育センター(2012)「生徒指導･学級経営上の課題への取組（事例集第二集）」
○島根県教育センター(2014)「学級集団づくり 魅力ガイドブック」
○島根県教育センター(2016)「校内研修ベストセレクション（生徒指導･教育相談・学級集団づくり）」
○島根県教育センター(2018)「リーフレット『教室に入りにくい子どもを校内で支える』」
○島根県教育センター(2021)「校内研修パッケージ『保護者と学校のよりよい関係づくり』」
○國分康孝 監修(1997)「エンカウンターで学級がかわる」小学校編　図書文化
○國分康孝 監修(1996)「エンカウンターで学級がかわる」中学校編　図書文化
○國分康孝 監修(1999)「エンカウンターで学級がかわる」高等学校編　図書文化
○國分康孝 監修(2010)「エンカウンターで不登校対応が変わる」　図書文化
○明里安弘（2007)「どんな学級にも使えるエンカウンター20 選」図書文化
○園田雅代　監修（2013)「イラスト版　子どものアサーション」合同出版
○園田雅代、中釜洋子、沢崎俊之編著（2002)「教師のためのアサーション」金子書房
○平木典子、沢崎達夫、土沼雅子編著（2002)「カウンセラーのためのアサーション」金子書房